

都市デザインに関する研究（その1）

——人間—環境系の記述と都市デザインの指標——

羽根 義 沢田 英一

（技術研究所）

（技術研究所）

Plan and Design of Compact City (No. 1)

——Description of the human-environment system and identification of pivotal indicators for urban design——

by Tadashi Hane and Hidekazu Sawada

Abstract

“The external world” is the world not subjectively articulated by humans, and “the environment” is the world to which significance has been assigned, that is, phenomenized, through active “comparison of context.” The existence itself is to be found wholly in speculation about significance. The temporal and spatial fields we face now—that is, “now - here” and “here - there”—to represent the whole of the intentionality of the “self,” and embedded in those temporal and spatial fields are the means to transcend ways of existing and to alter existence. By contemplating the design of cities in terms of “time” and “space,” I have identified the pivotal indicators of “sustainability,” “accessibility,” and “identity.” Sustainability implies that the image of the infinity of space is defined by the difference between “the future” and “now.” In addition, sustainability assigns significance to the temporality of “the future” and “now.” Accessibility implies the ease (with spatial and temporal variations) of transcending ways of being the “self” to construct new ways of being. Identity implies existence within space and time, both of which have undergone significant differentiations.

概 要

都市デザインを考える上で基本となる、人間—環境系の「意味化された環境」と「人間の存在」の関係について、「外界」「コンテクスト」「社会システム」「コトバ」「物象化」という概念を用いて記述する方法を考察した。また人間にとっての根本規定である「時間性」と「空間性」の意味化と、意味化による人間の存在について検討した。さらに「時間性」と「空間性」の意味化の視点から、都市に関する様々な問題から抽出される「サステナビリティ」「アクセシビリティ」「アイデンティティ」の指標の概念を明らかにした。

§ 1. はじめに

都市を語る視座は多種多様である。学術的にも社会学や、建築・土木工学、人間工学、都市計画学、経済学などの様々な角度からアプローチがなされている。このことは、都市デザインを考える上でも、どのような視点からアプローチするののかという基本的な枠組みが必要となる。

都市と人間の関係を読み取る出発点のひとつは、都市という環境が人間の具体的な活動によって出来あがっている、すなわち都市は人間によって造られる以外にありえず、また人間は都市から多大な影響を受けているという事実である。

楨らは、「都市や建造物は、人間集団のもつ深層

意識が時間をこえて造形する対象であるとするならば、われわれの都市への理解の第一歩は、そうした人間集団の深層意識が、都市の形態にどのようにあらわれてきたかを読みとる作業から始めなければならない。」¹⁾という。

本一連の報告では、都市のデザインについて考察するが、本報告はその第1報として、人間と環境とはどのような関係にあるのか、言い換えれば人間がどのように環境を生み出すのか、また生み出された環境の中に人間がどのように存在するのかについて、「人間—環境系」の機構を考察するとともに、都市デザインの指標の概念を明らかにすることを目的とする。

§ 2. 人間—環境系の機構

本報告において「環境」とは、ハイデガーのいう世界—内—存在²⁾の世界を指し、生命体、有機体が存在する物理的な場であるとともに、社会的な意味を有する広義の場と定義する。

本章では、人間—環境系の「意味化された環境」と「人間の存在」の関係について、「外界」「コンテクスト」「社会システム」「コトバ」「物象化」という概念を用いて記述する方法を考察する。

2.1 外界と環境、コンテクスト

従来の環境心理学系の研究においては、「外界」と「環境」が混同されるとともに、「環境」の実存性が暗黙裡に指定されていた。

行動主義心理学では、「環境」と「外界」が同一視され、「環境(=外界)」の実在性を認めるとともに、「環境」に対して「反応」を評価しようとする。また「反応」は行動に現れるとして、人間主体の内省的な知覚性、認知性は曖昧なものとして評価しない。さらに「環境」に対する「反応」の的一对対応性から「環境」及び「反応」の加算性が成立するとしている。

また新行動主義心理学は、行動主義と同様に「環境」の実在性は認めるものの、新行動主義の示すS-O-R(刺激—反応)図式ではOによってRは異なるとして「反応」の実在性については暗黙裡に否定される。またOによって「反応」は変化するものの、Oによって「環境」が異なるとは捉えていない。

ゲシュタルト心理学では錯視を主な研究対象にしているが、錯視は「外界」の実在性を間接的に否定することになる³⁾。「外界」が実在すると考えたとき、両義的な錯視図ではどちらの「外界」が正しいのか不明だからである。

行動主義心理学者ギブソンは「外界」の実在性を認め、人間主体が介在しなくても、「外界」に秩序(アフォーダンス)があると考えた⁴⁾。しかしこの概念には、認知心理学的視点から考えると難がある。例えば「外界」として「椅子」がある場合、その「椅子」には腰掛けするという秩序(アフォーダンス)が実在するとするが、腰を掛けるか、踏み台にするかは、人間主体によって、また状況によって異なってくるはずである。すなわちアフォーダンスの概念は、行動心理学の「外界」の実在性と、ゲシュタルト心理学での知覚の実在性を折衷した場合にのみ適用が可能なのである⁵⁾。

また、現象学はゲシュタルト心理学の展開と相

まっている。例えばフッサール現象学では、ゲシュタルト心理学での知覚実験の結果を踏まえ、知覚された「環境」を実存性の根拠としている。しかしフッサールは、知覚を実在性の根拠としながらも、「実在すると確信するのみである」として、実在性については不明である⁶⁾としている。

一方、現象学的心理学は、フッサールのいう還元、超越、変更の概念を心理学的に応用したものである⁷⁾。

しかしこの方法では、意識との照合によって現象した「環境」のみを対象としたもので、直接的には「外界」の実在性については触れていない。現象学的立場からは、「外界」の実在／不在性について論考することは論理的に困難である。

認知心理学では「外界」と「環境」とが混同され、スキーマとの照合によってのみ「外界」が現前すると考えており、暗黙裡に「外界」の実在性を認めている。しかし学習によって形成されるスキーマとの照合によって得られる環境が、その学習過程によって異なった様相を示す。このことは知覚性を否定することになり、実在性の根拠が失われる。さらに錯覚が学習によって異なって見えるのかは実証されていないのが現状である。

本報告では基本的な考え方として、「外界」および「環境」を異なった概念として捉える。また認知心理学での「照合」の概念を援用するが、単に学習されたスキーマのみを対象とするのではなく、生体記憶や身体性を考慮した知覚性を含ませ、さらに社会的環境の意味も含ませた拡張した概念として「コンテクスト」を考える⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。

ここで「外界」は人間主体によって分節されていない世界で、「コンテクスト」の能動的な「照合」によって「環境」として現象するとする。

2.2 意味化された環境の総体と私の存在

竹原は、「人間存在は世界に散在している多様な意味へと関与することによって、その都度己れの有り方を構築する。・・・すなわち、諸々の存在者は、その現れにおいて知覚されているのではなくて、現われにおいて、人間存在のそれへの先行的関与形式を告知しているものであり、つまり人間存在がそれへと関わることによって構築する有り方を告知しているものであり、それがその存在者が有意味であるという所以である。したがって存在論とは意味論であり、意味を問うことが存在論であるということが出来る。」¹¹⁾という。

すなわち、様々な外界は単なる裸の外界として実在しているのではなく、人間のコンテクストと

の照合により、有意味な環境として現象するのである。また人間が外界を意味化することとは、意味化した「私」がいるということでもある。意味化した、あるいは意味化しようと投企した総体は「私」の存在そのものであるといえる。

「意味化」とは、「関係付ける」「位置付ける」と換言できる。すなわち、様々な諸物や他者と関係付けられた、あるいは位置付けられた総体のなかに「私」が存在しているのである。

一方で、「人間存在の身体の振る舞い構造は、意味の集合態としての世界によって与えられるのであり、それ故に、私のその都度のあり方は世界によって贈与される。」¹¹⁾という。

しかし、意味が世界から贈与されるならば、「私」は介在せず、意味は一元的に定まることになる。ここでは、世界の意味は「私」のコンテクストに構造化され、そのコンテクストとの照合により、外界が多様で有意味な環境として現象すると考える。

2.3 環境とコンテクストの実在性

人間は、コンテクストとの照合によって外界を環境として現象させる。

現象した環境は感覚受容を通して知覚されるが、一方でコンテクストは人間の内的なイメージとして捉えられやすい。われわれは素朴実在論的に知覚像とイメージを分離して考えがちである。

しかし、ルビンの酒盃では、同刺激であっても異なった知覚が生起されるが、実在論は「知覚の恒常性／移調」説から矛盾を生じる。知覚と解釈は異なるとしてもどちらの刺激が妥当しているのかを示す義務が生じるのである。

ドゥーニは知覚像とイメージについて決定的な違いは見出せないとし、リチャードソンは、イメージを準感覚的なものとしている¹²⁾程度でその違いは明確ではない。

廣松も、まず感覚与件があり、ついでこれがある意味と結び付けられるとする2段階知覚説を批判し、認知されるものは同時に意味であり対象であって、その2つは不可分離である¹³⁾としている。さらに丸山も不可分離である¹⁴⁾とし、「生への関与性」のみであると指摘している。すなわち環境とコンテクストは、ともに現象したものであり、実在ではない。

2.4 コトバと非在の現象、物象化

もともと人間には、「カオスとしての人間—外界系」、つまり人間と外界とが完全に一体化して

いる状況がある。動物としての「ヒト」の状態である。

ユクスキュルは、動物はそのものにとって意味のあるもの、すなわち生体維持(ホメオスタシス)のために必要な意味、言い換えると生への関与性に対して十分適応している¹⁵⁾という。

一方、人間は動物とは異なり、本能的なホメオスタシスとしての構造と、意識としての構造の二重構造を有している¹⁶⁾。意識としての本性は、フロイトの快感原則という絶えず刺激を求め、かつ今までの「私」と新しい「私」を差別化しようとする能動的な差異化である。この能動的差異化は人間のみが有する。

能動的差異化はコトバによって共起される。コトバ自体がゲシュタルトであり、差異化そのものである。コトバは「外界」という非在を人間にとって有意味な「環境」として現象させる。そしてヒトは、コトバを使うことによって、外界を環境として客体化・秩序化する。また人間はコトバによって、外界を意味化するとともに、意味化された環境を物象化してきた¹⁷⁾。

2.5 コトバと社会システム、他者

「私」のコンテクストが「私」だけのコトバによる差異化の総体によって構築されたものであるとすれば、「他者」と関わることは不可能となる。「私」のコンテクストの構造は、「私」の体験した意味構造であり、そのコンテクストとの照合による外界を現象した環境は他者とは共有化されていないからである。

ここで、社会システムの概念が必要となる。

シュッツは社会的世界を(1)社会的直接世界、(2)社会的同時世界、(3)前世界、(4)後世界に分類した。この世界的直接世界とは、「私」と「他者」が同一の時間と空間を共有することによって、「私」が「他者」を直接的に経験しうる状況であり、社会的同時世界とは、「私」と「他者」が同一の時間のみを共有する状況をいう¹⁸⁾。

ここでは「私」と「他者」との間の何らかの人間的つながりは、お互いがコンテクストの中の同一の意味を共有していることにより、意味への適合より作り上げるお互いの有り方を相互に理解することによって可能になるのである。

この意味の共有と適合は、コトバの持つラング性から生じている¹⁹⁾。ラングとは社会共通のコトバであり、その語を用いるコード(規範)はその社会システムにある。例えば「信号が赤だ」というとき、それは「止まれ」という意味を一体一体対応

で指示しているものであり、各自が思い思いの解釈をしたら社会システムは成立しないというコトバがラングである。一方、パロールは個人個人の対話（ディスコース）が成立すればよく、コードの比較的自由的なコトバである。絶えずパロールがラング化するのは、コトバの差異化、増殖性、秩序化、シンボル化による²⁰⁾。

社会システムは「他者」との共通の意味集合態を共有するとともに、複数の行為者が相互に関連するためのものであり、そこにおいて各人はシステム全体の機能が作用するために、分化された役割を配分されて、全体システムに貢献する。あるいは、人間存在が、意味の集合態としての世界に散在している多様な意味へと適合するための秩序付けのためである。ルーマンは、「社会システムは、世界の複雑性の縮減という効果を世界に与える」²¹⁾という。

すなわち、「私」のコンテクストは、単に私特有の構造を為しているのではなく、社会システムの中で、ラング化されたコトバのコンテクストによって「他者」と意味的に共有化、適合化していると考えられる。

§ 3. 時間性、空間性と存在

本章では、人間にとっての根本規定である「時間性」と「空間性」の意味化と、意味化による人間の存在について考察する。

3.1 意味化される時間性と存在

一般的な常識では時間は、過去、現在、未来から構成されている。フッサールは、「未来予持—いま—過去把持」という時間意識が成立するとして「いま」は実在し、「過去」は意識のなかに記憶として存在している⁶⁾という。しかし時間が3つに分節されるためには、3つの有意義な環境が必要であり、各々に差異化した存在が必要である。

ポンティは、「私が時間と接し、私が時間の流れを知るのは、広い意味での私の現前野—つまりその背後には流れた一日の地平をもち、その前方には夕暮れと夜の地平を持った私が仕事を為しつつ過ごすこの時間である」²²⁾として、「私」に対して現象している現前野は、それ自身空間的地平をもつとともに、時間的地平を持つという。

また、ハイデガーは「『死へ臨む存在』が先駆となるとき、それはある存在者の存在可能のなかへ先駆するであるが、その先駆は実は、その存在

そのもののあり方なのである。」²⁾として、死への不安という情状性に対する先駆的覚悟性によって、本来的、全体的な実存の可能性を得るという。

さらに「現存在の根本的諸構造の可能的な全体性と統一性と展開相に着目するならば、これらの構造は全て根本において『時間的』であり、時間性の時熟の諸様態として理解されるべきものである。」²⁾として、気遣いの存在論的な意味は「時間性」であるという観点から考究している。

すなわち「いま—ここ」という現前野は、「私」の志向性の総体であり、そこにおいて、現前野を構成する「私」の状況の乗り越えの契機が潜んでいる。私が未来を描き出し、過去を保持するのは、「私」が面している現前野であり、その現前野において、意味化された時間性のなかに「私」という存在を規定したのである。

3.2 意味化される空間性と存在

ボルノウは、「人間は諸物の中に在るものではなくて、自分の回りの環境世界との関わりを持つ主体であり、その限りにおいて、その志向性によって特徴付けうる主体である」²³⁾という。

すなわち、人間が単に空間という容器に入っているのではなく、自らのあり方に即して空間を有意義な環境として現象させ、外界を有意義な空間として処理する能力を持つ存在であることを意味している。

また、人間は絶えず自らの有り方を超越することによって、現在の「私」の存在を突き崩し、新たな有り方を構築する動態性として捉えることができる。

人間が外界の意味化を目指して、ある有り方を確立しようとするとき、その意味を付帯する有意義な空間性を目指す。「そこ」に行けば、ある有り方を確立できるだろうという「予期」の元に、「そこ」を目指す。そして行動によって「そこ」を「ここ」に転換することを循環させて、存在の有り方を超越して存在の有り方を変えるのである。

3.3 意味化された「時間」と「空間」の関係

「ここ」から「そこ」へ行けば何が有るかという「予期」と予期に基づく「解釈」は、人間の存在に基づく差異化された意味的空間性の解釈であるが、その予期と解釈には存在の時間性の基盤を内在している。

「ここ」と「そこ」には、意識下にあっても時間性が介在しているのである。人間は「いま」と「未来」との時間性の差分化における「ここ」と「そこ」の

空間性を意味化する動態性である存在であるともいえる。一方で、「いま」と「未来」の予期と解釈には、各々意味化した空間性が内在している。

§ 4. 都市デザインの3指標と意味化

都市のデザインに関する様々な問題を考えるとき、「アクセシビリティ」「サステナビリティ」「アイデンティティ」の概念を抽出することができる。本章では、この概念を意味化した「時間性」と「空間性」から考察する。

4.1 サステナビリティ

20世紀の都市は工業化社会を背景に、急速かつ大規模な速度で拡大化、複雑化する一方であった。その結果、都市では人口問題や土地問題、住宅問題、交通問題、災害問題、環境問題等が発生した。

それは、人間の動態性に基づく空間の意味化が、空間の無限性、すなわち絶えず成長する空間を暗黙裡に想定していたと考えることができる。

ローマクラブは「成長の限界」で、サステナビリティ（持続可能性）という概念を提示したが、それは外界としての自然を意味化していく過程で、自然が永久に存在するのではなく、破壊されていくという自然の現前化に対する警告でもあった。

サステナビリティとは、また空間性の有する無限性というイメージが、「未来」と「いま」という時間性の意味化によって規定されるとともに、さらに「未来」と「いま」との差別化により、規定されることを示しているともいえる。

4.2 アクセシビリティ

ノリーの中世都市の地図を引き合いに出すまでもなく、都市は建物と街路からのみ成立している。建物と街路は都市の人間のふたつの場所であり、建物は都市とは無関係な場所であるのに対して、街路は都市以外にありえない人間の場所である²⁴⁾。都市の居住者が、建物と街路に存在しているのなら、建物と街路の両方を人間の場所として安全で、利便性のある快適な空間としなければならないだろう。

人間は絶えず「私」の有り方を超越することによって、現在の「私」の存在を突き崩し、新たな有り方を構築する動態性であり、「歩行」という行為によって「そこ」を「ここ」に転換することを循環させて、存在の有り方を超越して存在の有り方を変える。

一方、道具としての利用される自動車の持つ性質は、移動性能のみならず、住まい手としての内部空間および外観という居住空間としての意味を有している。現在では、自動車に求められる本来的な性能である移動性能であるよりも、内部空間および外観こそ、人間によって意味化された建物という環境の本来的な性能である。

つまり、自動車が単なる移動のための道具としてよりは、人間を収容する意味化された空間性として位置づけられていることを示している。

都市に居住する人間、また自動車を利用する人間の、「私」の有り方を超越して、新たな有り方を構築しようとする行為の容易性を示す指標が「アクセシビリティ」であり、時間性の差分に規定された空間性の更新性である。

都市の「私」は様々である。年齢や所得、性別、身体機能などいろいろな特徴を持った人々が、公平に「アクセシビリティ」の得られる都市のデザインが必要であろう。

4.3 アイデンティティ

1990年代よりEUの環境対策、都市政策として提起されているのが、コンパクトシティ²⁵⁾である。コンパクトシティは、サステナブルな都市の空間形態として提起された都市政策モデルであり、20世紀における「田園都市」、「輝く都市」、「メガストラクチャ」などに匹敵する都市像と考えられている。

その中心的な狙いは、社会的な公平性、都市中心部の活性化、効率的な公共投資、そして、都市生活の魅力と生活の質を高めることであり、①高い居住と就労などの密度、②複合的な土地利用、③自動車だけに依存しない交通、④多様な居住者と多様な空間、⑤独自の地域空間、⑥明確な境界、⑦社会的な公平さ、⑧日常生活上での自足性、⑨地域運営の自立性を挙げて、独自の地域空間として、地域の中に歴史や文化を伝えるもの、他にないものが継承されることが必要であると指摘している。

また、サステナブル コミュニティにおいては、そのチェックポイントとして、①アイデンティティ、②自然との共生、③自動車の利用削減のための交通計画、④ミックスユース、⑤オープンスペース、⑥画一的でなく、いろいろな意味で工夫された個性的なハウジング、⑦省エネ・省資源を挙げており、アイデンティティとして、①そこに住んでいることが誇りになるようなコミュニティか、②象徴的な建物や広場、ランドマークなど

があるか、③歴史や伝統を大切にしているか、④住民参加が促進しているか、住民の意識は高いか、⑤住民同士の強い結びつきがあるか、といった5項目のチェックポイント細目を挙げている²⁶⁾。

ここで示される「アイデンティティ」とは、その都市が独自の地域空間として、地域の中に歴史や文化を伝えるもの、コミュニティが形成されていることである。

EU諸国のコンパクトシティ政策では、アイデンティティの原風景として、C. レンのロンドン計画や、産業革命後のE. ハワードの田園都市を通して描かれたルネサンス中世都市がある²⁷⁾。

日本の都市の原風景はどこに求められるだろうか。日本人は原風景として明確な都市像を持っていないといわれる。また「都市風景という美意識が文化の意識となることがなかった。」ともいわれる²⁸⁾。

一方、槇らは、江戸のまちの研究を通して、「都市の相に基づく配置の術、道のつけ方、表層のあり方、特異点のつくり方、「奥」および「すき間」という空間概念、そのすべてに濃密にかかわる自然およびその形式化等は、我々の周辺に残された古い市街地の断片には勿論のこと、新しい市街地の中にすら、今日尚その残像を見出すことはさほど困難ではない。・・・日本の都市の特徴の中で最も卓越しているのは、他の地域社会、例えば西欧や中国、あるいは砂漠地帯のように、抽象概念による都市像の構築化よりも、むしろそれ等都市をつくりあげていく上で、自然および形式化された自然を様々なレベルで積極的に使用していった過程が強くみられる。・・・他の民族にくらべ昔からかなり高密度な社会を形成していた日本人にとって空間は有限で、こまやかなものとして印象づけられてきたに違いない。その結果、限られた空間の中に遠近法の差を相対的に設定するというデリケートな感覚が早くから芽生えていたのではなかったか・・・」¹⁾という。

また、ハイデガーは「現存在は覚悟性においておのれ自身へ立ち帰ってくる。その覚悟性は、本来的実存のそのつどの事実的可能性を開示する。そしてそれはこれらの可能性を、それが被投的覚悟性としてみずから引き受ける遺産のなかから開示するのである。」²⁾として、人間存在の本来的可能性は、ある何らかの歴史的遺産を継承しようという覚悟性のなかで、はじめて具体的なものになるという。

われわれは遺産としての都市像を原風景として持っていないのではなく、われわれの現前野の志

向性のなかに、過去の歴史的な都市像の意味化が未成熟であるためである。

都市のアイデンティティとは、意味化された空間性と、未来—いま—過去の時間性の中に、存在性を規定することであると考えることができる。

われわれが未来を描き出し、過去を保持するのは、われわれが面している現前野であり、その現前野において、われわれの存在が問われているのである。

§ 5. 終わりに

本報告では、人間—環境系の「意味化された環境」と「人間存在」の関係について、「外界」「コンテクスト」「社会システム」「コトバ」「物象化」という概念を用いて記述する方法を考察した。

人間—環境系の機構として、「外界」と「環境」を異なった概念として捉え、「外界」は人間主体によって分節されていない世界であり、「コンテクスト」の能動的な「照合」によって「環境」として意味化（現象）すること、また外界を意味化することは意味化した「私」が存在することであり、意味化しようと投企した総体が存在そのものである。

また、人間にとっての根本規定である「時間性」と「空間性」の意味化と、意味化による人間の存在について考察した。「いま—ここ」「ここ—そこ」という時間的、空間的現前野は、人間存在の志向性の総体であり、存在の有り方を超越して存在を変える動態性である。

意味化した「時間性」と「空間性」から、都市関する様々な問題から抽出される「アクセシビリティ」「サステナビリティ」「アイデンティティ」の指標の概念を明らかにした。

サステナビリティは、空間の無限性というイメージが、「未来」と「いま」という時間性の意味化によって規定されるとともに、さらに「未来」と「いま」との差別化により規定される。

アクセシビリティは、人間存在の有り方を超越して、新たな有り方を構築する行為の容易性（ある時間性に対する空間性の変位）を示している。

アイデンティティとは、有意味に差異化された空間性と時間性の中に存在を規定することである。

§ 6. あとがき

われわれを取り巻く様々な社会文化を通時的に俯瞰すると、形而上学的な『カオス（混沌）からコスモス（真理）へ』といった単純な調和論的な構図では表現できず、そこには常に三つの共通項が底通していることが分かる。

一つは、社会文化が進歩すると常に新たな問題点を生み出していることであり、もう一つは、その社会文化に対して必ず対症療法的な科学技術が生まれ、それをダイナミックな相互作用として絶えず繰り返していることである。科学技術の進歩は過剰なモノを生み出したが、それはわれわれの意識の物象化であり、その意識とは能動的な差異化に他ならない²⁸⁾。

三つめは、その繰り返しのなかで、「絶えず成長する」という暗黙裡のコンテクストが社会システムにあったことである。オゾン層の破壊は空間の限界性を示すとともに、人類存続という未来に対する警告でもあった。地球環境の破壊は、一方で持続可能性という概念を生み出したが、それ以上に自らの手によって構築してきた科学技術で、自らが存続し得ないのではないかという、人類のアイデンティティの喪失という不安を生み出したのである。

有意味な環境を現象させようと投企した総体が「私」の存在そのものであり、そして都市が応えられ得るものであるならば、何よりも「『私』のアイデンティティ」を生み出す都市のデザインが必要となるだろう。

<参考文献>

- 1) 横文彦他：“見えがくれする都市”，鹿島出版会，1980
- 2) M. ハイデッガー（細谷貞雄訳）：“存在と時間 下”，筑摩書房，1994
- 3) コフカ（鈴木，訳）：“ゲシュタルト心理学の原理”，福村出版，1988
- 4) ギブソン（古沢，他訳）：“生態学的視覚論”，サイエンス社，1986
- 5) レイコフ（池上訳）：“認知意味論”，紀伊国屋書店，1993
- 6) フッサール（渡辺訳）：“イデーⅠ，Ⅱ”，みすず書房，1992
- 7) キーン：“現象学的心理学”，東京大学出版会，1989年
- 8) 羽根：“リアリティとは何か”，可視化情報 Vol.12, No.46, 1992
- 9) 羽根他：“意味的環境の認知と行動に関する研究（その8）環境心理における場の問題”，清水建設研究報告 Vol.57, 1993
- 10) 羽根：“刺激に関する心理学／哲学的考察”，日本建築学会学術講演梗概集，1994
- 11) 竹原弘：“環境のオントロジー”，ミネルヴァ書房，2000
- 12) A. リチャードソン（鬼沢貞，他訳）：“心像”，紀伊国屋書店，1973
- 13) 廣松渉：“存在と意味 第二巻”，岩波書店，1993
- 14) 丸山圭一郎：“（現前の記号）解体への序論” 記号学研究 IV”，1984
- 15) V. ユクスキュル（日高敏隆，他訳）：“生物から見た世界”，思索社，1973
- 16) 丸山圭三郎：“生命と過剰”，川出書房新社，1987
- 17) 丸山圭三郎：“文化のフェティシズム”，勁草書房，1985
- 18) F. ソシュール（小林英夫訳）：“一般言語学講義”，岩波書店，1973
- 19) A. シュッツ（渡辺光他訳）：“社会理論の研究”，マルジュ社，1991
- 20) N. ルーマン（佐藤勉監訳）：“社会システム論”，恒星社厚生閣，1993
- 21) 丸山圭三郎：“ソシュールの思想”，岩波書店，1988
- 22) M. ボンティ（竹内芳弘，他訳）：“知覚の現象学（Ⅰ），（Ⅱ）”，みすず書房，1988
- 23) O. F. ボルノウ（西村皓・森田孝監訳）：“解釈学研究 第二巻”，岩波書店，1993
- 24) 田村敏久：“都市の哲学”，株式会社文芸社，1999
- 25) 海道清信：“コンパクトシティ”，学芸出版社，2001
- 26) 川村健一：“サステイナブル・コミュニティ”，学芸出版社，1995
- 27) J. バーネット：“都市デザイン”，鹿島出版会，2000
- 28) 羽根他：“地下文化の様相”，丸善，1990

